

このページでは、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースをお届けします。

シンポジウム：医療イノベーションと諸制度 新しい医療技術を 臨床現場に届けるために

10月13日に政策ビジョン研究センターは、ワシントン大学医学部長、ラリー・J・シャピロ教授(Larry J. Shapiro)を迎えました。



「個別化医療の制度の在り方の議論を」
(ラリー・J・シャピロ教授)

シャピロ教授は、遺伝学、分子生物学、生化学の研究者として著名な方で、現在は、医学部長兼ワシントン大学側の東大親善大使を務めておられます。2

度目の本学訪問となる今回は、当センターが公共政策大学院と共催をするシンポジウム『医療イノベーションと医療に関わる諸制度を考える』にご登壇いただきました。

今回のシンポジウムのテーマは、今日の日本の社会に医療のイノベーションをどのように組み入れていくかというもので、欧米や我が国の最先端の研究者や各界の識者

の方々に議論していただきました。このシンポジウムは、基調講演と2つのパネルディスカッションから構成されています。

第1部の基調講演では、まず八山幸司氏(内閣官房医療イノベーション推進室企画官)が、我が国において今後医療イノベーションをどのように推進してゆくのかについて、現状をご報告されました。また、ハイメ・カロ氏(United Bio source Senior Vice President)からは、欧州諸国で採用されているヘルステクノロジーアセスメントについてご報告があり、医療上の価値の評価をめぐってドイツや英国で行われている取り組みについて紹介がありました。そこでは、評価が実は極めて難しく、社会的な議論の中で進められていることが指摘されました。

米国では医療に対して GDP ベースでは日本の倍のコストを費やしています。シャピロ教授は、「米国における個別化医療と予防医療」と題するスピーチの中で、遺伝子、バクテリアなどが疾病に与える影響の解明が可能となったことに加えて、患者個人にとってより適切で効率的な治療法の選択が可能となったこと、それによる治療費の削減可能性について具体的な実例を挙げて説

明されました。一方で、規制当局の対応が遅れていて、個別化医療を幅広く効率良く臨床現場に届けられていないという米国の現実も浮き彫りにされました。さらに、規制の複雑さ、費用便益分析、遺伝子の情報に関する差別、倫理、個人情報保護など複雑な問題が複合的に絡み合うため、個別化医療については技術的な研究を進めるとともに、制度の在り方についても今後様々な分野から深い議論が進められていくべき事項であるとの問題提起がされました。

第2部では、「医療イノベーションの現状と未来への期待」と題して、医療イノベーションを取り巻く環境と将来的な課題が議論されました。本学からは、理事・副学長の松本洋一郎教授と政策ビジョンセンター長の城山英明教授がパネルディスカッションに加わり、安全規制や価格規制のあり方を議論するのはもちろんのこと、医療の情報化をさらに推進して、より早くより安全で有効な医療技術を臨床現場に届けるために医療上の価値を評価する仕組みの重要性などが共有されました。

第3部では、「医療イノベーションの促進と社会基盤の整備」と題して、将来的な方向性について議論されました。本学からは、林良造客員教授(公共政策大学院)、杉本和幸客員教授(公共政策大学院)、児玉安司客員教授(法学部・医学部)がパネルディスカッションに加わり、高齢化が進展する中での医療財源のあり方、医療資源の有効活用と医療提供体制の効率化、安全や価格面についてのより合理的な規制の模索など、医療制度のあらゆる面から医療イノベーションの実現に向けて取り組むべき方向が示されました。

当センターでは、新しい技術が社会に与える影響について様々な分野横断で研究を行っており、医療分野における新しい技術についても今後関係各位と意見交換を進め研究を進めて参りたいと存じます。

バリュー・ベイスド・プライシング

医療上の価値を 評価する仕組み

政策ビジョン研究センター特任助教 佐藤 智晶

我が国では医療イノベーション実現のために、診療報酬・薬価などにおいて費用対効果の観点を導入することや、イノベーション成果を適切に評価することが、大きな課題となっている。他方、海外でも医薬品に関して、最も有効かつ革新的で、しかも必要とされる新薬により高い薬価をつけようという試みが今まさに進められようとしている。それが、バリュー・ベイスド・プライシング(Value Based Pricing, VBP)という制度である。

バリュー・ベイスド・プライシングという考え方は、根本的に新しいものではないのかもしれないが、世界的にみてもこれまで全面的な導入に成功した国はない。特に医療機器を含む医療技術についてはいえば、議論ははじまったばかりである。医薬品については英国で議論が先行しているものの、医療イノベーションを推進

しようとする我が国では、短期的は現行制度のもとで、中長期的には諸外国の制度に照らして、何らかのバリュー・ベイスド・プライシングを検討してゆくことになるだろう。その際には、医薬品と医療機器との間の違いのように、個別の医療関連製品の特性に鑑みることはもちろんのこと、そもそも何を医療上の価値(イノベーション)とするのか、イノベーションの計り方やそこで用いられるエビデンスとはどんなものか、そしてどうやってイノベーションの促進にインセンティブをつけてゆくのかを議論することが避けられない。医療の質を高めつつ医療費の増大を抑えるような、より費用対効果の高い医療を実現する診療報酬・薬価制度を模索するために、今後さまざまな試行錯誤が期待される。



http://pari.u-tokyo.ac.jp/policy/PI11_04_value_based.html
全文は当センターウェブサイトの Policy Issues をご覧ください。

シンポジウム

医療イノベーションと医療に関わる諸制度を考える

日時：2011年10月13日(木)

場所：本郷キャンパス 法文1号館2階25番教室

主催：公共政策大学院

共催：政策ビジョン研究センター/ワシントン大学

定員：400名